

一昨日御書

文永八年九月一二日 五〇歳

一昨日見参に罷り入り候の条悦び入り候。

抑人の世に在る誰か後生を思はざらん。仏の出世は専ら衆生を救はんが為なり。爰に日蓮比丘と成りしより、旁法門を開き、已に諸仏の本意を覚り、早く出離の大事を得たり。其の要は妙法蓮華経是なり。一乗の崇重三国の繁昌、儀眼前に流る、誰か疑網を貽さんや。

而るに専ら正路に背きて偏に邪途を行ず。然る間聖人国を捨て善神瞋りを成し、七難並び起こりて四海閑かならず。方今世悉く関東に帰し、人皆土風を貴ぶ。就中日蓮生を此の土に得たり。豈吾が国を思はざらんや。仍って立正安国論を造りて故最明寺入道殿の御時、宿屋の入道を以て見参に入れ畢んぬ。而るに近年の間、多日の程、犬戎浪を乱し、夷敵国を伺ふ。先年勘へ申す所、近日普合せしむる者なり。彼の太公の殷の国に入りしは西伯の礼に依る。張良の秦朝を量りしは漢王の誠を感ずればなり。是皆時に当たりて賞を得たり。謀を帷帳の中に回らし、勝つことを千里の外に決せし者なり。

夫未萌を知る者は六正の聖臣なり。法華を弘むる者は諸仏の使者なり。而るに日蓮忝くも鷲嶺・鶴林の文を開いて、鷲王・烏瑟の志を覚る。剩へ将来を勘へたるに粗普合することを得たり。先哲に及ばずと雖も、定んで後人には希なるべき者なり。法を知り国を思ふの志、尤も賞せらるべきの処、邪法・邪教の輩、讒奏・讒言するの間、久しく大忠を懐いて、而も未だ微望を達せず。剩へ不快の見参に罷り入ること、偏に難治の次第を愁ふる者なり。

伏して惟れば泰山に昇らずんば天の高きを知らず、深谷に入らずんば地の厚きを知らず。仍って御存知の為、立正安国論一巻之を進覧す。勘へ載する所の文、九牛の一毛なり。未だ微志を尽くさざるのみ。

抑貴辺は当時天下の棟梁なり。何ぞ国中の良材を損ぜんや。早く賢慮を回らして須く異敵を退くべし。世を安んじ国を安んずるを忠と為し孝と為す。是偏に身の為に之を述べず、君の為、仏の為、神の為、一切衆生の為に言上せしむる所なり。恐々謹言。

文永八年九月十二日

日蓮花押

謹上 平左衛門尉殿